

## 国語

第一問 左は、大澤真幸『経済の起原』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

今日、われわれは、必要なモノ、価値あるモノのほとんどを、商品交換によって得ている。貨幣を用いて商品（としてのモノ）を購入するという形式によって、である。商品交換の原初形態、その起原は何か。物々交換である……と一般には言われている。物々交換から、成熟した商品交換へはどのように変化したのか。その論理はシンプルだ。物々交換が成立するためには、「欲望の二重の一致」が必要になる。すなわち、私が欲する物を所有する他者が、まさに私が所有する物を欲していなくてはならない。

A

貨幣を用いた商品交換は、迂遠化うえんされた物々交換である。言い換えれば、貨幣による商品交換は、本質的には物々交換であり、貨幣はその潤カうるかツ油あぶらに過ぎない。経済学の教科書には、このような「物語」が記されている。

商品交換の源流は物々交換であるとするストーリーは、経済学にとって最も重要な「神話」である。近代的な意味での経済学の始祖アダム・スミスが、この物語を明示的に語っている。以降、経済学にとって、この神話は、創設的な意味をもつ物語となった。もつとも、スミスがひとりでこの物語を無から創造したと言ったら、それは言い過ぎである。スミス以前にも、このような神話へと方向付けられた議論を展開した思想家がいた。そもそも、アリストテレスが、『政治学』の中で、この神話の予兆になるようなことを語っている。アリストテレスによれば、最初は家族は必要なものをすべて自分で生産する自給自足の生活を送っていたのだが、やがて、ある者は農業に従事し、ある者は酒造りに特化し、……といった具合の専門化が生じ、互いに交換

し合うようになる。そこから貨幣が生まれたというのがアリストテレスの説であり、スミスの一歩手前にある。

いずれにせよ、商品交換は本来は物々交換であるという神話は、経済学を成り立たせている基本的な公理〔注1〕のようなものである。そのことは、今述べたような、単純化された「経済史」の物語にだけではなく、経済学の理論にもはっきりと現れている。たとえば、「セイの法則」がそれである。アダム・スミスより少し後の世代に属するフランスの経済学者、ジャン＝バティスト・セイの名を冠するこの法則は、「供給は自らに対する需要を創造する」という命題で要約される。つまり、「供給＝需要」という恒等式〔注2〕が成り立つ、というわけである。この命題は、物々交換で考えれば、自明に正しい。同じものが、交換当事者のどちらの観点から捉えるかで、供給としても需要としても捉えられる。つまり、需要と供給は同じものなのだから、この恒等式は一種のトートロジー〔注3〕である。この法則を商品交換にまで拡張するということは、貨幣が介入する商品交換を本質的には物々交換と変わらぬものと見なすことに等しい。

だが、経済学の原点となるこの物々交換の神話、商品交換は物々交換から生まれてきたものであり、商品交換は貨幣によって迂回された物々交換に過ぎないとする神話は、歴史的な事実としても、論理としても妥当ではない。物々交換から、やがて貨幣を使った商品交換が発生してきた、などという物語は、成り立たないのである。そのような事実は見出みいだされず、また論理的にも混乱している。

それでは、市場における商品交換が支配的な交換様式として定着する前には、何が主要な交換様式だったのか。物々交換ではないとすると、何なのか。贈与が——しばしば双方向的な贈与が——一般的であった。これは、経済人類学には常識に属することだろう。この分野の古典中の古典は、マルセル・モースの「贈与論」である。これは、北米先住民、ポリネシアやメラネシア等の民族、そして古代社会の儀礼的な贈与を比較研究した論文である。これらの無文字社会では、儀礼的な贈与の社会的な意味は大きく、極論すれば、人々は——とりわけ男たちは——贈与のために生きている、と言ってもよいほどである。

実際には、市場に国家も存在しないような原初的な共同体でも、商品交換の原始的な形態のように見える「物々交換」のごとき交換が行われていることは確かである。しかし、ほんのわずか観察するだけで、この種の交換から商品交換が発生してきたわ

けではない、ということが分かる。

第一に、無文字社会の原始的な「物々交換」は、一般には、後に会うことがほとんどないような——少なくとも継続的な関係を築くつもりがないような——よそ者との交流として執り行われるのが一般的である。物々交換から、貨幣を用いた商品交換が発生するという神話は、当事者たちの間で継続的で頻繁な交換が必要だった、ということ的前提にしている。とすれば、原始的な物々交換が、そのまま商品交換に直結しないことは明らかであろう。

第二に、原始的な物々交換はしばしば、儀礼的な贈与と似たやり方で執り行われる。交換に先立って、双方の陣営で饗宴きょうえんが催されたり、双方が遊戯的・演技的に攻撃性をひけらかしたりするのだ。これらは、まさに儀礼的な贈与においてなされることがらである。ということは、物々交換自体がしばしば、贈与のコンテキストの中でなされているのである。つまり、それらも広義の贈与である。

さて、すると、二つの問いが浮上してくる。第一に、——物々交換から商品交換が発生してきたのではないのだとすると——、われわれはこう問わなくてはならない。贈与が支配的な交換様式から商品交換が支配する交換様式へは、どのように転換するのか。この転換の論理的なメカニズムはいかなるものなのか。事実的な歴史過程は多様で錯綜さくそうしているに違いない。しかし、ここで問いたいことは、そうした事実から抽出されうる——あるいはそうした事実を規定する——論理である。

第二に、より基礎的な疑問がある。そもそもなぜ、人は贈与をするのか。経済というものの原始的な形態は、贈与を骨格とする交換様式だとする。だが、それはなぜ、いかにして発生したのか。人間にとって、どのような意味で贈与は必然なのか。まずは、これら二つの問いの意義を説明しておこう。

二番目に挙げた、しかし、より基礎的な問いから考えてみよう。ここで、贈与というものを最も広い意味で捉えておきたい。つまり、誰から誰へと贈与されたと明確に定義したいケースもまた、贈与のうち①に含めておく。共同体の一部のメンバーが獲得したモノが、とりたてて「贈与した」という自覚をもたずに共同体に直接にキ託①され、その上で、そのモノを必要とするメン

バーに分配され、与えられるようなケース、つまるところこれは、「能力に応じて貢献し、必要に応じて与えられる」というコミュニケーションの原理なのだが、これもまた、贈与の最も原初的な形態に含めておく。

贈与をこのように広く捉えたとき、狩猟採集民を含む、あらゆる人間社会には贈与の行動が見出される。いや、むしろ次のように言うべきである。人類（ホモ・サピエンス）の最も原初的な生活の形態をそのまま残していると考えられる遊動的な狩猟採

集民——彼らは中に十家族ほどを含む五十人規模のバンド<sup>[注4]</sup>で移動している——こそ、今述べたコミュニケーション原理に近接した贈与の、きわめて忠実な実践者である。たとえば、ある男が、大型の動物を仕留めたでしょう。彼がそれを自分のモノだとか、自分の家族のモノだとか主張することは、絶対にありえない。もしそんなことを主張したら、彼は、バンドから間違いなく追い出されるだろう。獲物は、バンドの全員に分配される。その獲物を捕ってきた者の取り分が大きくなる、などということもない。

人間社会のこの特質を、動物社会学のコンテキストの中に置いてみたらどうか。実のところ、人間以外の動物種では、ほとんど全くと言ってよいほど、贈与や分配のような行動は認められない。この場合、贈与・分配の対象として念頭に置かれているモノは、もちろん、食物である。食物を、他の個体に贈与したり、分配したりする動物は、ほとんどないのだ。そんなことはない、と反論する者もいるだろう。親鳥は雛鳥<sup>ひなどり</sup>に給餌するのではないか、と。だが、動物に見られる「分配」らしき行動は、鳥の給餌行動がその典型であるように、基本的には、直接の血縁者を相手にしたときや、生殖に関与する場面に限られているのである。親鳥は、自分の子にしか給餌せず、たとえ自分の子であっても、自ら餌を獲得できるほどに成長したならば、親は絶対に食物を与えたりはしない。生殖に関連した場面や直接の血縁者が相手であった場合の「分配」は、遺伝子の包括適応度<sup>[注5]</sup>の論理から簡単に説明できてしまう。生殖から独立した局面で、あるいは直接の血縁者が相手ではないケースで、食物を分配する動物種は、ほとんどいない。

今、われわれは繰り返し「ほとんど」という留<sup>⑦</sup>ホを付けている。そう、厳密に言えば、遺伝的に最も人間に近い二つの現存種、つまりチンパンジーとボノボには、きわめて萌芽的なものではあるが、食物を分配したり、互酬的に贈与したりする行動が認められるのだ。とはいえ、彼らは、人間から見ると、互酬的な贈与を通じて価値ある食物を得ることが、非常に「苦手」だと見え

る。ひとつの実験を紹介しておこう。チンパンジーにリンゴを持たせておき、実験者である人間が、ブドウとの交換を「提案」する。チンパンジーは、リンゴかブドウかどちらか一方を選ばなければならないような状況では、圧倒的にブドウを好むことがあらかじめ確認されている（およそ八割のチンパンジーがブドウを嗜好する）。しかし、人間が自分のブドウと、チンパンジーのもつリンゴとの交換を提案しても、実際に交換が成立することはほとんどない（交換の成功率は二%程度）。交換する食物の嗜好の落差を大きくしていけば、交換が成立する確率は高まっていく。ブドウ（人間）とキュウリ（チンパンジー）の交換であれば、五割程度の確率で実際に成り立つし、ブドウとニンジンとの交換は、九十%以上の確率で実現する。ともかく、チンパンジーは、明らかに得る食物の価値が失う食物の価値より大きいことが分かっている。必ずしも交換に応じない。人間から見ると、チンパンジーは、交換を十分に活用できていないように見える。

だが、繰り返せば、それでも、野生のチンパンジーとボノボは——頻繁でないが——、子どもなければ、兄弟姉妹でもない他個体に対して食物を分配することがある。もつともチンパンジーの贈与・分配は、人間から見ると、かなり消極的である。つまり、他の個体に自発的・積極的に食物を与えているというより、その食物を他の個体が取ることができる、と記述した方が実態に近い。それゆえ、人によっては、チンパンジーが肉を分かち合う行動は、単に、「**D1**」に過ぎない、とする。しかし、このような評価は事態の本質を逸している。他個体の手元にあった物を、平和裡りに取ることができるのは、その他個体の容認に「**D2**」が含意されているからだ。

つまり、チンパンジーの贈与が人間の目からはかなり消極的に見えても、なおチンパンジーは、萌芽的な贈与の概念をもっている、と解釈することができる。彼らは、奪われるということが何を意味しているかをもちろん知っているが、それだけではなく、与えることとはどういうことなのかを理解している。このことを印象的に示す事実を紹介しよう。アカゲザルには、いかなる意味でも分配行動は見られない。そのアカゲザルに、彼らの好物であるリンゴを与えようとするとうなるだろうか。実験者である人間は、リンゴを贈与しようとしている。しかし、アカゲザルは、好意でリンゴを差し出す人間を脅すようににらみつけ、うなり声を出しながら、その手からリンゴを奪う。アカゲザルは、他個体の手元にある食べ物を得る方法としてこれしか知らな

いからだ。つまり、アカゲザルは、贈与（される）という概念をもたず、彼らの選択肢の中に贈与に向かう行動がまったく入っていないのだ。もちろん、チンパンジーの場合は違う。チンパンジーは、同じ状況で、リラックスした雰囲気、飼育係の手を咬むこともなく、リンゴを得るだろう。

何のために、こうした事実を紹介し、検討しているのか。それは、贈与の起原を探究することの意義を明確にするためである。確認すれば、人間以外の動物種では、食物を贈与する行動はほとんど見られない。ということは、贈与がいかにして可能か、と問うことは、人間の人間たる条件を解明することでもある、ということだ。進化の系統樹の上で最も人間（ホモ・サピエンス）に近い、大型類人猿の二種だけが、きわめて消極的ではあるが贈与への指向性をもった行動をとることがある、という事実は、問いの意義に関するこうした解釈を、さらに正当化することになるだろう。「贈与」は、動物との関連の中で、人間（ホモ・サピエンス）を特徴づけている何かなのだ。遺伝子の構成において人間（ホモ・サピエンス）にごく近い種だけが、わずかに贈与の兆<sup>⊕</sup>コウを示しているということが、そのことを強く示唆している。

さて、もう一つの問い、贈与を基軸とした交換様式から商品交換を中心にした交換様式への転換がどのように生じるのかという問いの意義や含意について説明しておこう。モースによれば、贈与は三つの義務の複合の産物である。三つの義務とは、与える義務、受け取る義務、そしてお返し義務だ。これらの義務が総合的に含意していることは、贈与は双方向的であることを、つまり互酬を指向している、ということである。一方が与え、他方が受け取ったとき、お返し義務があるとすれば、贈与は互酬的なものになる。実際、ほとんどの贈与は互酬化され、AからBへの贈与があれば、BからAへの反対贈与（お返し）が生ずる。

すると、すぐに疑問が生ずる。互酬的な贈与は、実質的には、物々交換や商品交換と同じものではないか。そうだとすると、贈与を中心におく交換様式から商品交換が支配的であるような交換様式への移行は、直接に果たされてしまい、特別な説明を必要としないのではないか。しかし、そうではない。

なぜなら、互酬化されうるとしても贈与は、商品交換や物々交換と質的な相違があるからだ。モノの移動の軌跡が同じだとしても、互酬的な贈与をそのまま物々交換や商品交換と同一視することはできない。どう違うのか。第一に、商品交換においては、「所有権」がまるごと交換されるが、贈与においては、モノが移動しても、「所有権」はなお贈与者に帰属しているように見えるのだ。贈与において移動するのは、「使用権」のみである。この点は、次のことを思うとすぐに分かる。

それをさらに転売しても何の問題もない。モノの F2 は、F3 に属しているからだ。しかし、誰かから F4 を勝手に転売したら、とんでもない非難を受けるだろう。F4 は、なお、究極的には F5 に属しているからである。

第二に、互酬的な贈与は二つの行為からなるが、商品交換、つまり売買は単一の行為である。互酬的な贈与は、二つの贈与を足し合わせたものである。商品交換はそうではない。売りと買いは単一の行為であって、「売り」だけで、あるいは「買い」だけで自立することはない。買い手が商品を受け取っても、貨幣の支払いをすませてなければ、取引は未了である。買い手が支払っても、商品を受け取っていないければ、売買は成り立っていない。贈与の場合は違う。一方から他方へと貴重なモノが贈られれば、たとえばお返し（反対贈与）がなされていなくても、贈与としては成立している。

その証拠に、贈与者は相手に対して、公然と、あるいは正当に、お返しを要求することはできない。彼は、お返しを期待しているかもしれないが——たいていそうだが——、しかしお返しを<sup>⓪</sup>セイ求してはならないのだ。売買の場合は、もし貨幣を支払ったのに商品を受け取っていないければ、買い手は売り手に商品をよこすようにと要求することができるし、またそうすべきなのだ。贈与の場合は違う。いくらお返しを切実に望んでいても、それを正当に要求することはできない。それどころか、お返しの要求は、恥ずべきこと、はしたないこと、むしろ悪いこととさえ見なされているのである。このように、互酬的な贈与と商品交換は、モノの移動にだけ着目すると似ているが、互いに根本的に異質である。

[注] 1 公理——ある理論の前提となる仮定で、理由なく正しいとされるもの

- 2 恒等式——変数がどの値をとっても成り立つ等式。変数が決まった値のときだけ成り立つ等式は方程式
- 3 トートロジー——同じことを表す言葉の繰り返し。同語反復
- 4 バンド——集団
- 5 包括適応度——働きバチが自分の子どもではない幼虫の世話をするなどのような、社会性を有する昆虫の利他行動の進化を説明するために提唱された概念

問1 空欄Aには次の5つの文が入る。その順番として最も適切なものを次から選べ。

1

- a この不都合を克服するために、人々は、交換の媒体としての貨幣を発明した。
  - b 他者は、その貨幣によって、自分が欲しているモノを所有する別の他者から、そのモノを得ることができる。
  - c この条件は、しかし、稀まれにしか満たされない。
  - d 私は、他者の所有物を得るとともに、その他者に貨幣を渡す。
  - e 私が他者が所有する何かを欲しているも、他者が私の所有物に関心をもつとは限らない。
- ① a ↓ d ↓ b ↓ c ↓ e
  - ② a ↓ e ↓ c ↓ b ↓ d
  - ③ c ↓ d ↓ b ↓ e ↓ a
  - ④ c ↓ e ↓ a ↓ d ↓ b
  - ⑤ e ↓ a ↓ d ↓ c ↓ b

問2 傍線部Bに関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

2

- ① 商品交換は物々交換から生まれたという両者の連続性の根拠は、原始的な物々交換に儀礼的な贈与に似たやり方が見られる点にあるということ
- ② 原始的な物々交換は、単なるモノの移動ではなく、交換の前に双方が遊戯的・演技的に攻撃性をひけらかしたりする儀礼的な贈与の性格を伴う場合があるということ
- ③ 商品交換は物々交換から生まれたという経済学の神話を補完するかのようには、物々交換には人間の原初的な営みを反映した贈与における儀礼性が伴う場合があるということ
- ④ 原始的な物々交換において双方が遊戯的・演技的に攻撃性をひけらかすことには、商品交換にはない儀礼的贈与の有効性をお互いに知らしめる意味があるということ
- ⑤ 物々交換には双方が遊戯的・演技的に攻撃性をひけらかすなどの儀礼的な贈与の性格がはるか昔から備わっており、交換におけるその本質は現在主流となった商品交換においても決して変わらないということ

問3 傍線部Cの「遊動的な狩猟採集民」に関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

3

① 原初的な生活を送る狩猟採集民のバンドでは、そのリーダーがメンバーのために獲物を捕り、自身のリーダーシップのもと各家族に公平に分配する

② 原初的な生活形態をとる狩猟採集民は、獲得した食物を自身の子どもたちに与え、愛情をもって育てる

③ 原初的な生活を送る狩猟採集民のバンドでは、一部のメンバーが獲得した食物が共同体のものとされ、貢献度に応じることなく分配される

④ 原初的な生活を送る狩猟採集民のバンドでは、大きな獲物を捕ってきたメンバーの家族にやや多くの量を配分することで、その功に報いる

⑤ 原初的な生活を送る狩猟採集民のバンドでは、大きな獲物を捕ってきたメンバーの功績を大いにたたえることで、共同体の結束をさらに強める

問4 空欄D1とD2に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

4

D 1

D 2

① 黙認された贈与 互酬への指向

② 奨励された贈与 交換への指向

③ 黙認された交換 贈与への指向

④ 奨励された盗み 交換への指向

⑤ 黙認された盗み 贈与への指向

問5 傍線部Eに関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

5

- ① チンパンジーやボノボのような人間に近い類人猿に見られる贈与行動から贈与の起原を探ることで、人間の本質に迫ることができるということ
- ② 人間以外の動物にも多く見られる食物の贈与行動から、進化の過程において贈与がどのように広がったのかを解明することで、現在の人間がおこなう贈与の本質を捉えることができるということ
- ③ 人間のみに見られる贈与行動の起原を追究することで、他の動物種とは異なる人間の人間たる条件とは何かを解明することができるということ
- ④ 進化の系統樹の上で人間に最も近い類人猿に見られる贈与行動と、贈与の概念をもつ他の動物種の贈与行動との違いを明確化することで、人間の人間たる条件を解明することができるということ
- ⑤ 進化の系統樹の上で人間に近いチンパンジーやボノボの贈与行動と、アカゲザルの贈与行動とを比較することで、人間を特徴づける贈与の起原に迫ることができるということ

問6 空欄F1からF5に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

6

- |   | F 1    | F 2 | F 3   | F 4    | F 5   |
|---|--------|-----|-------|--------|-------|
| ① | 贈られたモノ | 使用权 | 購入した者 | 購入したモノ | 贈られた人 |
| ② | 贈られたモノ | 所有权 | 販売した者 | 購入したモノ | 贈られた人 |
| ③ | 購入したモノ | 使用权 | 販売した者 | 贈られたモノ | 贈った人  |
| ④ | 購入したモノ | 所有权 | 購入した者 | 贈られたモノ | 贈った人  |
| ⑤ | 購入したモノ | 使用权 | 購入した者 | 贈られたモノ | 贈られた人 |

問7 傍線部Gの内容と矛盾しない説明はどれか。最も適切なものを次から選べ。

7

- ① 商品交換は、モノが移動してもなお所有権が売り手にあるように見える点、そして売り買いが単一の行為である点において、互酬的な贈与とは異質であるということ
- ② 互酬的な贈与と商品交換は、モノが移動する点では同じだが、前者は被贈与者に所有権が帰属するように見えるのに対して、後者では売り手になお所有権が帰属するように見える点において異質なものであるということ
- ③ 互酬的な贈与は、使用権がなお贈与者に属するように見える点、そして贈ることとお返しすることが別々の行為を足し合わせたものである点において、商品交換とは異質であるということ
- ④ 互酬的な贈与と商品交換は、モノが移動する点では同じだが、前者は贈ることとお返しすることが単一の行為であるのに対して、後者では売り買いが別々の行為を足し合わせたものである点において異質であるということ
- ⑤ 互酬的な贈与は、モノが移動しても持ち主がなお贈与者であるように見える点、そして公然とお返しは要求できない点において、商品交換とは異質であるということ

問8 本文の内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

8

- ① 市場も国家も存在しないような原初的な共同体でも商品交換の原始的な形態のようなものを見ることができ、こうした交換から商品交換が発生したと考えることができる
- ② 贈与は与える義務、受け取る義務、お返し義務という三つの義務の複合の産物であり、互酬的な贈与はモノの移動の軌跡が同じであるがゆえに商品交換と本質的には変わらない
- ③ 親鳥が雛鳥に給餌する行為は、直接の血縁者を対象とする点において、人間社会における贈与行動の根本原理にも通じる贈与の典型的な場面である
- ④ 「供給⇨需要」という恒等式を商品交換にまで拡張することは、貨幣を媒体とする商品交換を物々交換と本質的に変わらないものと見ることになる
- ⑤ 自給自足の生活から専門分化が生じ、交換が始まって貨幣が生まれたとするアリストテレスの説は、困ったときは足りないものを贈り合うという贈与の世界と商品交換との連続性を示した点において、アダム・スミスの一歩手前にある

問9 文中の二重傍線部⑦から⑭のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを、次から選べ。

- |    |   |   |            |   |              |   |              |
|----|---|---|------------|---|--------------|---|--------------|
| 9  | ⑦ | ① | 一カッ 購入     | ② | 所カッ の警察署     | ③ | 時間の関係でカッ 愛する |
|    | ④ |   | カッ 況を呈する   | ⑤ | カッ 走路から飛び立つ  |   |              |
| 10 | ⑩ | ① | 服務キ 程に反する  | ② | キ 生虫を駆除する    | ③ | 再建をキ 図する     |
|    | ④ |   | 会議のキ 日を決める | ⑤ | 完成に向けて躍キ になる |   |              |
| 11 | ⑪ | ① | 自己ホ 身を図る   | ② | 要求に譲ホ する     | ③ | 増ホ 版を刊行する    |
|    | ④ |   | ホ 乳瓶を洗う    | ⑤ | 筆のホ 先        |   |              |
| 12 | ⑫ | ① | 均コウ が崩れる   | ② | コウ 顔無恥       | ③ | 年コウ 序列型賃金    |
|    | ④ |   | 優勝コウ 補     | ⑤ | 地域振コウ に携わる   |   |              |
| 13 | ⑬ | ① | 少数セ イ鋭     | ② | 食事を節セ イする    | ③ | 意識不明からの覚セ イ  |
|    | ④ |   | 選手宣セ イ     | ⑤ | 部長就任を要セ イする  |   |              |

第二問 左は、玉井茂『西洋哲学物語』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

今でも快楽主義者をエピキュリアンと呼ぶ。

A

という意味である。そのエピクロスは、アリストテレスら快

楽主義者の生活実践を理論化した哲学者であり、近代への影響も大きい。

エピクロスの前半生は不詳とされている。だが、紀元前三四一年ごろイオニア地方のサモス島でアテネからの寄留者（移住者）の子として生まれ、一二歳ごろヘシオドスの『宇宙物語』を機縁に哲学の道に入ったようである。プラトン主義者パムピリウスについたとも伝えられる。が、当時は下賤げせんの身分に属した学校教師ネオクレスの子であり、母は町の祈禱師きとうしであるこの人には、貴族的なプラトンのアカデメイア〔注1〕は疎遠だったに違いない。すでにアカデメイアは、当時三代目の塾頭クセノクラテスによって経営されていた。これと並ぶアリストテレスの学校リュケイオンは、アリストテレスの国外逃亡（前三二二年）後、テオフラストスによって主宰されていた。しかし、かれ自身がどちらの学派にも疎遠だったとしても、哲学を志す者としてこの両派から、とくに両派間の論争から学んだことは当然である。だが、これらよりかれに影響の大きかったのは、テオス島で教えていたナウシファネス、この人をおしてのレウキッポスとデモクリトスの原子論〔注2〕である。ナウシファネスがその渦中であつたピュロンのカイ疑派〔7〕の影響も考えられる。ただエピクロス自身は、誰をも師と仰がぬ自学自習の人であると自負しているが、事実上の師はナウシファネスであろう。しかし、この人にたいしても悪態をついており、「肺魚」「物いわぬ魚」「うそつき」〔8〕「無節ソウ男」〔9〕と罵っている。これはナウシファネスが「自然学者フイジコス」であつても人間的真理に無感覚な人であることを指しているようである。

エピクロスは三百巻にも達する多数の著書を書いたといわれるが、残存しているのはヘロドメス、ピュトクレスおよびメノケウスにあてた三つの手紙、それに『主要教説』と呼ばれる断片だけである。これらはディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』等にも記録されている。

B

このころアテネはもはや昔日の栄光を失っていた。アレクサンドロス大王の制覇とともに、アテネは政治的にはマケドニアの

植民地と化し、その大帝国の一部に過ぎぬありさまであった。しかし、文化的には依然として指導的地位を維持しており、学園の中心であることに変わりなかった。そこには古いアカデメイアとリュケイオンのほかに、キティオンのゼノンが新たに開いた学校——壁画で彩られた柱廊を講堂としたことから「ストア」と呼ばれる——ができていた。だから「エピクロスの園」は、これらと並ぶ四つめの学校であった。この学校は、アカデメイアやリュケイオンのような貴族の子弟の教育機関ではなく、庶民階級の人びとはもちろん女子にも開放された男女共学であり、そのうえ下賤のもの、奴隷や妓女（ヘタイラ）<sup>[注3]</sup>にさえ門が開かれていた。この点同じく庶民的だったストア派と似ており、当時の社会と文化とからの自己遮断においても共通性をもつ。ただ学説的には、エピクロス派はストア派と決定的に相容れないところがあった。同じく「自然に従う」としても、ストアの「自然」が理性であるのに対して、ここではそれが快楽である。したがってストアのように感覚的な自我の **C1** などは、ここでは説かれず、むしろ自我の大胆な **C2** が求められる。しかもここは、学校あるいは学派というよりも「友情の園」であり、「かくれて生きよ」という師のモットーにしたがって社会から逃避した隠遁者の港、互いに肩を寄せ合う同志的連帯のグループであり、同学同行者の共同体であった。

「エピクロスの園」は、アテネの郊外、外港ペイライエウスへ行く途中のメリート地区にあり、師エピクロスの講義は庭園で行われた。家屋は弟子たちの住居にあてられ、また社交のために使われた。この学校は友情の園とはいいながら、独特の位階制をもち、エピクロスだけが「賢者」としていわば教授、他の者は「賢知の探求者」として助教であり、さらに助手および学生の階層に分けられる。——「助教」に属するのはランプサコス時代以来の高弟メトロドロスをはじめ、同じくランプサコスの人ポリアイノス、庭園塾の後継者となったミュテレーネの人ヘルマルコスなど。その後アテネ以外で出現したエピクロス派集団にもこの位階制があり、それぞれの資格に応じてアテネの本部に月シヤ（ツキシヤ）を送ることになっていた。——この学園にはアテネ以前期から女子の入門が許されており、レオンテオスの妻テミスタのような比較的上流の夫人のほか、ポリアイノスの愛人ヘデアのような妓女もおり、とりわけメトロドロスの愛人であったレオンティオンは有名であり、アテネ時代の入門者として地方の組織作りに活躍したようで、その実力を買われていた。その論文『テオフラストスを駁す』は、後世キケロの称賛をうけている。

D

男女共学のこの学園では、男女の交際は自由であり、それが部外者からは無秩序な乱交として指弾された。——たしかに男女の交際がプラトニックだった証拠はない。同時にしかし、無秩序で乱脈だった証拠もない。そもそもエピクロスの教えには、友情の尊重の反面、エロスの恋愛のパッションを回避する戒律があり、そのことが「エピクロスの園」をエレガントに飾る結果となったかもしれぬ。だが事実上は、性的交渉の禁令もなく、いわゆる不倫はただ「不法」の場合に禁じられただけである。しかし、元来性的快はつかの間のものであり限界をもつ快、本来的な快とされる持久的な「苦の排除」とは矛盾関係にあるとして不必要とされた。——エピクロス派の本領は快をもって「祝福された生の始源アルファであり目的テロスである」とする快樂主義（ヘドニズム）にある。しかしエピクロスによれば、快には三種ある。「自然的で必要な快」、「自然的であるが不必要な快」、および「不自然で不必要な快」。食欲は第一種に属するが、性欲はぜいたくな食事とともに第二種に属する。すなわち性欲は、自然的ではあるが不可欠ではないのである。一説によれば、美や富とともに結婚も、かれは不必要なものとしたという。だがエピクロスの園では、毎月規則的に宴が催されたと伝えられる。はたしてそこで、同派の人びとが不可欠な第一種の飲食に止め、第二種的美食にわたらなかつたかどうか。同じように性欲の快も、「自然的」発露によって「不法」のりを越えなかつたかどうか。

エピクロス自身もヘディア、レオンティオンといった妓女たちと寝たという噂うわさを否定しておらず、師弟という以外の関係があったのは事実のようだ。しかもこれは、エピクロス主義においては不道德なわけではなく、この園では、有夫の妻といつても妓女とそれほど区別されなかつた。「もしも自然の生理から肉欲を欲するなら、生まれや家柄や地位を考慮せずに、美しさや年齢や顔かたちを問題にすべきだ」と考えていたという。しかもレオンティオンは、その学殖のゆえに、身分的には上位で⑤テイ節テイ節なエピクロスの妻テミスタよりも学園内の資格は上であつたという。——これはこの園では哲学的な能力が格づけを決定したからで、エピクロス派の人びとにとって第一に必要なのは知恵であつた。したがつてこの派では、食欲や性欲がすべて「動的快」を与えるに対して、知恵のもつ「静的快」こそ真正の快である。これは「身体において苦のないこと、魂において乱されぬこと」であり、究極的には「アタラクシア（平静）」と呼ばれる心境である。この心境を指し示すのが知恵であり、哲学はそのための知識である。

プラトン主義にその典型が見られるように、かつてポリスの市民は、自己をポリスなしに考えることができなかつた。ポリスの善が自己の善であり、「いかに生くべきか」の個人道徳は「ポリスはいかにあるべきか」の政治学、社会道徳に包摂されていた。だが、マケドニアを起点とするアレクサンドロス大王の大帝國は、ギリシアのポリスをもその版圖のうちに包含し、ポリスの自主的体制を無意味にした。もはや人びとは、自己をポリスではなくてコスモポリス〔注5〕に結びつけるほかなかつた。いやコスモポリスという世界空間に投げ出されて、自己の支えを失つたといつたほうがよからう。E キュニコス派のディオゲネス〔前四一〇—三二三年ごろ〕、あの樽〔注6〕の中で暮らしたといつた乞食哲學者は、アレクサンドロスの訪問を受けたとき、「天下の浪人」といつたような気持ちで自分を「コスモポリテース〔注7〕」と呼んだ。ホメロス〔ホーマー〕時代の伝統において、ペリクレスの民主政治黄金時代のアテネでは、人間の徳は全人的卓越にあり、政治的・社会的人間であること、アリストテレスのいわゆる「ポリス的」政治的動物」の完成にあつた。しかしアレクサンドロス時代のアテネでは、「非ポリス的」非政治的個人」が問題である。また古典期には軽蔑された専門人が尊重され、全人的不能率に分業的能率主義がとつて代わる。昔のクセノフォンは軍人政治家であると同時に文人であつたが、今の軍人は軍人として、文人は文人として生き、それ以外ではない。地中海貿易の発展がポリスの自給経済を破壊してゆくのに対応して、哲学は古典期の総合性を失つて世間知となつて道徳化し宗教化し、諸科学の専門化が進行する〔ヘレニズム期における個別諸科学の発展〕。ポリスはホウ壞〔注8〕したのである。

アレクサンドロス大王が死んだのはエピクロスの青年時代、この年〔前三二三年〕エピクロスは、出生地サモス島をあとにはじめてアテネに出た。兵役に服してアテネの市民権を獲得するためであつた。大王の死後、後継者たちの間には激しい争いが続き、このころアテネには反マケドニアの独立運動も台頭してゐた。だが、アテネの所有者階級はマケドニア総督と結んでゐたので、独立運動は民衆だけのものとなり、国論の統一には困難があつた。それでも周辺のポリスとの同盟もあつて、民衆は武力蜂起を達成することができ、ラミアの戦争でアテネ軍が勝つた。雄弁家のデモステネスやヒュペレイデスが民衆に歓呼をもつて迎えられたのはこのときである。だがまもなくポリス同盟は解体し、国内の分裂、マケドニア軍の増強によつてアテネ軍は敗北し、無条件降伏、そして軍政の強化となつた。ヒュペレイデスは殺され、デモステネスは自殺した〔前三二三年〕。アテネには恐怖

と危険がつづく。

生産と商業の中心は、東方に移動し、これに伴って住民の移住、多数の奴隷化が進行する。かつて見ぬ貨幣経済の嵐が国内を吹き荒れ、ポリスの自給自足アウタルケイアはその基礎を失った。一方には、大奴隷所有者と高利貸しの国外勢力と結んだ勢威、他方には、零落と凶作に悩む民衆があり、貧富の対立は深刻化を加えていった。このような乱世にあって、エピクロスFはポリスの独立運動に参加した一敗残兵であり、政治と社会に絶望しかもてなかった。かれの友である喜劇詩人メナンドロスは、人間の運命を「悲しみにやつれること」とし、世の不幸と悲惨とを伝えている。一般に厭世的えんせいなムードが支配し、「こんな世の中をどうして生き抜くか」が問われる。エピクロスの哲学はこれに答える人生観であり、ただ「かくれて生きよ」と教える。だから、政治的には、改革の期待をもたぬ「ノン・ポリ（注8）」であり、現実には、反動的でないとしても保守的であった。事実エピクロスは、法律が尊重すべきものであることを説き、悪法であっても守られなくては秩序の破壊になるとした。——それにしても、われわれはこんな世の中に何を期待できるのか。自分一個のほかにはないではないか。かつてポリスが基礎的条件として求めたアウタルケイア（自給自足）は、今はもう個人にしか求められない。そしてこのような自足的個人の間にこそ友愛も育つ。

アリストテレスもまた『ニコマコス倫理学』で「友愛ピリア」を論じ、「何人も友愛がなければ生きようと欲しないであろう」とした（第八巻）。しかしこのことは、「人間は本性上ポリ斯的動物である」という原則と矛盾しており、すでにもうアリストテレスにおいて、超ポリ斯的思潮が醸成されつつあったことを示す。だが、もはやポリスでないエピクロスには、この矛盾はない。かれはアリストテレスの友愛、その最高形態としての「徳の友」をエピクロスの園において求めたのであり、ここは

**G** 教養人の友愛実践の道場である。——「全生涯をとおして幸福であるために知恵が用意してくれるもののうち、とりわけ最大のものは友情の獲得である」といわれる。だが友情は、友人への期待や依存を意味するのではない。同じくわれわれは、期待や依存を神々に対してもつべきではない。といっても、エピクロスはまず理論的に神々の存在を否定することから出発するのではない。この点では、法律の場合同様、世間の習俗に従うとしても、その神々はわれわれ人間には無関係と主張される。神々は中間的宇宙（intermundia）に悠悠自適の生活をしているが、別世界のわれわれ人間とは接触がなく、賞罰

も禍福も与えない。かれの神々は慈悲おんちようも恩寵おんちようもないのであり、おのずから礼拝の対象にもならぬ。

<sup>H</sup> 神々への期待も依存もそして恐怖も無意味だとするエピクロスは、死への恐怖も無意味だと説く。われわれがこの生をえる以前に「生存」の恐怖をもたなかったように、現世において死後の「不生存」への恐怖もありえない。かれの感覚論からは、善も悪も感覚に属する。ところが、死は肉体とともに魂をも解体させるから、生存中の「機能」も「運動」も「感覚」も、死の境位注9にはない。すなわち死は、「感覚の欠如」であり、善でもないが悪でもない。要するに死は「われわれにとっては何もものでもない」。そもそも「われわれが存在する限り死は存在せず、死が存在するときにはわれわれはもはや存在しない」。死の経験というものはないのである。——このようなエピクロス説は、一つにはその自然哲学の当然の帰結として主張されるのであるが、一つには死への恐怖、死後の責苦への不安を一掃するためである。これらの恐怖や不安には「何の根拠もない」のであり、単なる「心の惑乱」である。存在するものの一切は原子と空虚であり、死による身体の解体とともに魂もまた解体する。このこと正しい認識によって不死への空しい願いは消滅するのであり、ピタゴラス⇨プラトンの転生や再生はありえない。エピクロス派がくり返してこのような原子論とその帰結としての死生観を説いたことは、古代末期にいかにも民衆の迷信が強かったか、いかに死後の責苦が広く信じられていたかを裏づける。もし中世のキリスト教的地獄信仰に対して、死後の生命、死への恐怖を否認させたものが近代科学とするなら、古代の迷信と闘ったのは、デモクリトス⇨エピクロスの原子論的唯物論であった。

右記著作物は、2023年6月6日に著作権法第67条の2第1項の規定に基づき申請を行い、同条同項の規定の適用を受けて掲載しているものです。

〔注〕 1 アカデメイア——古代ギリシャのプラトンが開設した学園。プラトンの死後、弟子が受け継いでいた。アカデ

ミーの語源

2 原子論——自然はそれ以上分割できない微粒子（原子）と真空からできていると考える基本的自然観の一つ

3 ヘタイラ——古代ギリシャで教養のある遊女を表すことば

4 ポリス——古代ギリシャの都市国家。古代ギリシャでは、都市（周辺村落を含む）そのものが国家と見なされ

た

- 5 コスモーポリス——世界国家、国際都市
- 6 乞食——僧が食べ物を請いもとめながら行脚して修行すること（托鉢僧<sup>たくはつそう</sup>）から転じて、食物などを他人からもらい請う行為、または、そのことによって生活を営む人
- 7 コスモーポリテース——国籍・国民感情にとられない人。国際人。コスモポリタン
- 8 ノン・ポリ——政治に無関心であること。政治に無関心な人
- 9 境位——「位置づけ」のこと。特定の思想や立場から解釈して位置づけること

問1 空欄Aに入る言葉はどれか。最も適切なものを次から選べ。

14

- ① エピクロス之父
- ② エピクロスの孫
- ③ エピクロスの師
- ④ エピクロスの徒
- ⑤ エピクロスの母

問2 傍線部Bの具体的な説明として、最も適切なものを次から選べ。

15

- ① アテネは、かつてのような地中海世界における文化的指導的地位を維持できていないこと
- ② アテネにある、アカデメイア、リュケイオン、そしてストアという名門学校が以前の活気を失っていたこと
- ③ アテネは、アレクサンドロス大王によって征服され、大帝国の一部として植民地になっていたこと
- ④ アテネは、かつてのように学問の中心でありつつも、貴族の子弟の教育機関が衰退傾向にあったこと
- ⑤ アテネに昔からある三つの学校が勢いを失い、「エピクロスの園」という新しい学校ができたこと

問3 空欄C1とC2に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

16

C1 C2

① 肯定 克服

② 克服 肯定

③ 肯定 肯定

④ 克服 否定

⑤ 克服 抑制

問4 傍線部Dについて、性的快樂に関するエピクロスの考え方を、著者はどのように述べているか。最も適切なものを次から

選べ。

17

① 性的快樂は、人間にとって、美や富や結婚とともに自然的に必要なもの

② 性的快樂は、人間が生きていくうえで、心を惑わす不自然で不必要なもの

③ 性的快樂は、ぜいたくな食事と一緒に、自然的ではあるが不可欠ではないもの

④ 性的快樂は、自然的に必要な飲食の延長にある「自然的」発露といえるもの

⑤ 性的快樂は、エピクロスの園で毎月に催された宴の時のみに許されるもの

問5 傍線部Eについて、当時の哲学者たちを取り巻く現実を、著者はどのようなものだとするのか。最も適切なものを次から選べ。

18

- ① マケドニアの征服により、ポリスの閉鎖的体制がなくなり、地中海の自由貿易の発展が人々を豊かにした
- ② マケドニアの征服により、それまでのポリスの国家体制と自給経済が破壊されて人々は生きていけなくなった
- ③ マケドニアの支配によってポリスの自主的体制が無意味になり、ポリスの人々は自己のあり方を見失った
- ④ マケドニアの支配によってポリスの政治体制はホウ壊したものの、地中海貿易の発展がポリス経済を助けた
- ⑤ マケドニアの支配によってポリスの自主的体制が無意味になり、アテネ民主政時代の哲学への信頼が失われた

19

- 問6 傍線部Fについて、エピクロスの政治思想はどのようなものだと著者はいうのか。最も適切なものを次から選べ。
- ① 改革に期待をもたず、かつてのペリクレス的民主政治黄金時代を理想とする思想
  - ② 政治的改革に期待せず、世の不幸と悲惨な現実についてひたすら嘆く思想
  - ③ 民衆による政治改革の期待をもたず、すぐれた哲学者による独裁政治を待望する思想
  - ④ 改革の期待をもたない非政治的立場で、現状についてはどちらかという保守的な思想
  - ⑤ 穏健な政治改革を支持し、悪法であっても従うべきだという保守的な思想

問7 空欄Gに入るものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

20

- ① 自主的個人が相互に自己完成を目指す
- ② ポリス市民として自己完成を目指す
- ③ 自主的個人が理性的存在になることを目指す
- ④ ポリス市民としての自覚を目指す
- ⑤ 自主的個人が非社会的な自己完成を目指す

問8 傍線部Hについて、エピクロスにとって死とはどのようなものか。最も適切なものを次から選べ。

21

- ① 「感覚の欠如」であり、肉体は解体するが魂は永遠の解放になること
- ② 転生や再生のために、肉体と魂がいったん解体すること
- ③ 「感覚の欠如」であり、人間にとって何ものでもないこと
- ④ 肉体の解体であり、魂だけが神々による審判に立ち会うこと
- ⑤ 「感覚の欠如」であり、人間にとって善や悪の判断がしにくくなること

問9 本文の趣旨と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

22

- ① エピクロスの哲学は、人間の徳は全人的卓越にあるというアテネ民主政黄金時代の哲学を理想とし、ヘレニズム期における諸科学の専門化を批判した原始論的唯物論である
- ② エピクロスの哲学は、ポリス市民としての必要な教養を、社会から隔絶した共同生活の中で快楽という自然に従って学ぶことを重視した原子論的唯物論である
- ③ エピクロスの哲学は、非政治的で反動的な思想ではあるものの、キリスト教的地獄信仰における死への恐怖という古代の人々を支配していた迷信と闘った原子論的唯物論である
- ④ エピクロスの哲学は、無秩序な乱交を認める快楽主義ではあるものの、古代の人々が抱いていた神々への期待や恐怖、そして死への迷信を否認する原子論的唯物論である
- ⑤ エピクロスの哲学は、非政治的で保守的な思想ではあるものの、中世キリスト教的地獄信仰に対して死への恐怖を否認した近代科学にも比せられる、古代の迷信と闘った原子論的唯物論である

問10 文中の二重傍線部⑦から⑭のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを、次から選べ。

- |    |       |             |   |              |   |              |
|----|-------|-------------|---|--------------|---|--------------|
| 23 | ⑦ — ① | カイ 告 処 分    | ② | カイ 古 趣 味     | ③ | カイ 勤 賞       |
| 24 | ① — ① | 妄 ソウ に ふ ける | ④ | 問題の カイ 決     | ⑤ | 法律の カイ 正     |
| 25 | ④ — ① | ソウ 海 艇      | ② | バンドの 演 ソウ    | ③ | 飛行機 の ソウ 縦   |
| 26 | ⑤ — ① | シヤ 沸 消 毒    | ② | ソウ 世 記       | ④ | 予 防 注 シヤ     |
| 27 | ④ — ① | シヤ 罪 会 見    | ⑤ | 山 の シヤ 面     | ③ | 四 シヤ 五 入     |
|    | ② — ① | 師 テ イ 関 係   | ⑤ | 首 相 官 テ イ    | ④ | テ イ 主 関 白    |
|    | ⑤ — ① | テ イ 防 の 釣 り | ② | テ イ 淑 な 女 性  | ⑤ | 模 ホウ す る     |
|    | ④ — ① | 国王 の ホウ 御   | ③ | ビ ール の 気 ホウ  | ④ | 給 与 の ホウ 給 表 |
|    | ⑤ — ① | 模 ホウ す る    | ⑤ | 給 与 の ホウ 給 表 | ④ | ホウ 建 制 度     |